

読書

ビジネス、トレンド中心

ピエール・ブルデュー 超領域の学

一著、加藤晴久編



の関わりや、社会学に賭けるブルデュー自身の思いがきわめて率直に語られている。エコール・ノルマルで哲学を学んだのち、社会学に転じ、構造主義人類学やウェーバー社会学などをへて独自の「人間学」を構想するに至った経過が、思想的な格闘の同時代史としてつきりわれわれに伝わってくる。

は、現代フランスを代表する社会学者。一昨年十月に一週間あまり日本に滞在、精力的にこなした一連の講演や座談の記録がこのほど出版された。哲学、人類学、教育学、経済学……と「超領域」的なブルデュー理論の全貌をうかがい知るのに重宝な一冊である。

全貌をうかがい知る重宝な一冊

たえばブルデューのいう「ハビトゥス」概念は、どういうわけで提案されたのか。本書を読むとその舞台裏がわかるよ。この概念は、主体/客体の二元論を乗り

とまれ本書は、いま注目のブルデューがどういう場所から発言しているのか、明確に伝えてくれる。入門書としては成功だと言えよう。

末は今村仁司、廣松渉両氏の座談で、これも楽しめる。両氏はブルデューが、実体論から関係論へ、議論を大きく転回した点は評価できるが、その割には不徹底なところがまた沢山残っているではないかと批判する。ブルデューは誤解だと応戦するが、噛み合わない印象だ。彼の仕事はどこまで本質的なかは同じ版元から次々出版されるという翻訳を見極めるべきだろう。

東京工大助教授 橋爪大三郎

<第三種郵便物認可>

<魂>に対する態度

永井均著



哲学はやり切れない。難解な用語を振り回すから嫌いだ。こんな偏見の持ち主は、本書を読むといいたる。ハ私達が生きていくとはどういうことか、他者とは何か……といった、誰にとっても基本的な疑問が、誰にもわかるように論じてある。厳密な、だが丁寧でやわらかな語り口だ。本書の論文は「議論のための一叩き台」として使い捨てにされるべきもの。だが、著者は言う。しかし、論文集全体を読み通すと、ずしりと手がたえが残る。結局のところただ一つのテーマをめぐら、一貫した思考の筋道が浮き彫りになる。著者がその導きの糸とするのが、ニーチェとワイトゲンシュタインだ。哲学は伝統的に「真なる言説と善なる言説は必然的に一致すること」を自明の前提としてきた。が、真であっても道徳的でない「邪悪な真理」も存在しうる。それを指摘したハニーチェこそが、哲学の正系である。ひとが道徳的になるまうのはなぜか。その根拠は道徳的でありえない。ゆえに道徳は、根拠のない力に支えられてい

他我の哲学を分かり易く論じる

整理する手並みは鮮やか。また各部の末尾に、これまで寄せられた批判にこたえる「質疑応答」が付してあるのも工夫だ。細かく見れば異論もありえようが、本書の成功は疑えない。読後感もさわやかである。

「魂」をもち、他者の存在こそ理解不能な矛盾である。ハ他者とは……あまりにも遠い隣人だ。ハ魂に対する態度とは、……それに向かつて態度をとることができないものに対する、愛や共感や理解を超えた態度にほかならない。こうした洞察にもとづきデリタやクリプキなどの所説を批判的に

東工大助教授 橋爪大三郎

読書

読書

1991-5-1/8

MUFFIN LIBRARY



やきもち焼きの土器づくり



やきもち焼きの土器づくり

クロード・レヴィ=ストロース
遠辺公三訳
みすず書房 ¥2,117

〈著者紹介〉
1908年、ベルギーに生まれる。パリ大学卒業。文化人類学者。著書に『親族の基本構造』『野生の思考』『構造人類学』

〇二の橋の遠考委員(本の架せかみ) 今村仁司(東京大学文学部) 川村二郎(東京大学) 栗本慎一郎(明治大学) 田中優子(東京大学) 養老孟司(東京大学)

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)

構造主義という、奇妙な名前の現代思想が日本に初めて紹介されたのは、一九六〇年代のこと。その総帥レヴィ=ストロースが、数年前に丹精こめて書き上げた書物が、このほど翻訳された。主著『神話論理』(全四巻)がまだ訳されていないので、彼の神話学の全体像を知るには、とりあえず本書を読むのが手っとり早い。

神話学の醍醐味を心ゆくまで堪能させてくれる。「昔、太陽と月は、地上で一人の妻を共有していた。妻は太陽を好み、月を嫌った。怒った月は、太陽の姿を隠し、つるを伝って天へ昇ってしまった。妻は粘土の籠を抱え、月を追って天へ昇ろうとした。それを見た月が、つるを切ったので、粘土は地上に散らばり、妻はヨタカに姿を変えた。こんなパロディの神話をかわきりに、読者はたちまち、もつれた神話の糸を解きほぐしていく、神話分析の魅力の虜になる。

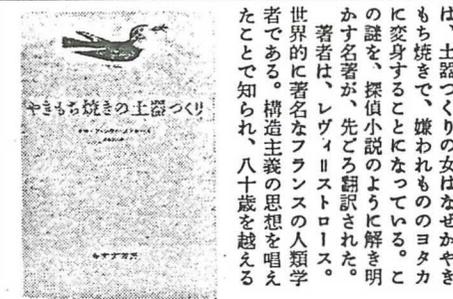
別の神話の……細部の変形だとか……二つ別の神話を統一できるようなもの……(訳者あとがき)。神話を生み出すのは、意識的な理性ではない。無意識の思考、「野生の思考」である。神話に登場するのは、身近な動物たちだ。口が耳まで裂け、食欲で嫉妬ぶく、夜行性のヨタカ。滅多に糞をせず、樹上でおとなしく生活するナマケモノ。糞を投げちらす、やかましいホエザル。神話的思考を組み立てるこれら「動物素」が、一連の対立をかたちづくる。例えば、口唇への挿取/肛門の保持/肛門からの放出、という具合に。そして別の神話は、こうした対立関係を保ちながら、対立の各項を少しずつ入れ替えていく。こうした変換関係を表す、いわば比例式にも当たるのが、レヴィ=ストロースの言う神話分析の「基本定式」だ。

神話の存在理由は何か? レヴィ=ストロースの答えは、多分こうだろう——それは、神話の材料となる諸々の項のあいだに関係を生み出すためである。世界の意味、宇宙の意味が、そうやって明らかになる。「土器づくり」が「やきもち焼き」の全体がもたらす必然なのである。この結論をどうも信じるかは、読者の自由だ。しかし、彼の神話学が、今世紀の最も勇気ある知的冒険であることは、何びとも否定できないだろう。

好者「気がつけば機械化により失われ、日本中旅をした。種を絶望に燃える女性騎手候補生から、ホップ開催まで全編が馬への愛情に満ちている。鞍馬だ、けいては新しい馬の存在理由、人間との共存について考えさせられる一冊。」

構造主義の総帥の今世に最も勇気ある知的冒険

BOOK REVIEW



クロード・レヴィ=ストロース
遠辺公三訳
やきもち焼きの土器づくり
みすず書房・2900円

〈著者紹介〉1908年、ベルギーに生まれた人類学者。構造主義の中心的思想家。著書に『親族の基本構造』『野生の思考』など。

近現代文明とは違った人間精神のあり方を解明する神話分析

近代文明とは違った人間精神のあり方を解明する神話分析

界の意味を考える素材にちょうどよいのだ。ところで北米には、ナマケモノがいないから、同じ対立を別な動物(リス)に置き換えなければならない。ナマケモノは樹の上に暮らしていて、時たま、地上の決まった場所を渡すが、そのとき頭を下にして降りてくる。頭を下にして降りるのは、リスも同じだからだ。こんな具合にしらべていくと、たぐさんの神話がこの種の変形によつてつきつき生み出されているという関係がわかる。そのことは、必ずしもインディアンの人びとに意識されていないが、実際そうなのだ。こういう研究を、神話分析という。

近代日本の批評 昭和篇①

柄谷行人編、浅田彰、運實重彦、三浦雅士著

雑誌「季刊思潮」に連載された座談会による昭和批評史の展覧。この下巻は、戦後(一九四五〜一九八九年)を収める。昭和四十年(一九六五年)までを三浦雅士氏、以後を浅田彰氏が担当し、冒頭に問題提起を行っている。



戦後の精神世界の起伏浮き彫り

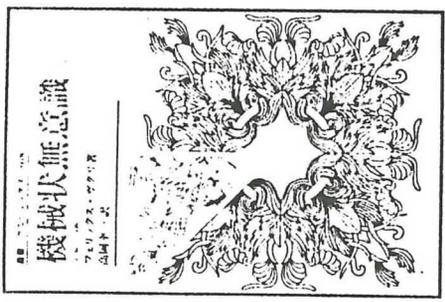
戦後七〇年代に大きな断層があり、わが国にもようやく世界的な水準の批評が現れたとみる。たとえば、彼ら四人だ。四人のなしたげた仕事からすればこうした自信も当然と思いが、固有の困難もあろう。浅田氏も言いつつに「対象が……近い過去で……自己言及

橋爪大三郎

BOOK

ブルースト作品を批評した問題の書 『機械状無意識』

フレリックス・カトリ 穂積啓一訳 ● 東京大学出版会 1990年



ポスト・モダン哲学の旗手カトリが、大作家ルセル・ブルーストの「求われた時を求めて」を批評した問題の書。原著は一九七九年に出版されている。その内容は、さすがにカトリだけあって一筋縄ではいかない。全体は二部からなる。第一部「機械状無意識」は、分析の方法論をのべる部分。キーワードはアジヤンスマン(錯列)とトリネロ(手ノボ取り作用)だ。この原理が、作品のいろいろな要素を空間的・時間的に配列して全体を組み立てている――どうやらそういうことが書いてあるらしいのだが、ほんとうにそうかというか、私は自信がない。

リソーム地図である。……それ自体で一つのスキソ分析のモノグラフである。(三五五頁) とう宣言する著者は、思い切りよく、作品をズタズタに切り刻んでしまう。なるほどポスト・モダン批評である。 どうぞ自ら言っても、この本は難解だ。たとえば、論議対象材へのある種の詩的受動性……が創造への道を開く。この受動性は、支配的フアルス至上主義的価値観のコンテクストにおいては、ブルーストによって女性らしきとして体験される(三四四頁)とある。これなど「ブルーストは何を求めても、創作意欲を創設された。ただ、自分がホモなのびるかたため、女性らしきに愛されなかったけれど」という意味ならな

うか。 カトリは「『無意識の本質』と称して、ある作家人物の顔が、さまざまな作家人物の顔とイメージが重なっている」という多角的な網の目を描きかけた行っている。なかなか面白く難解だ。でもこういう分析が、ブルーストの作品の価値や味わいという関係があるのか、よくわからなかった。 とにかく本書は、よく出回っているポスト・モダン批評の標準らしい。「文学部理論教室」の第9講も、本書の理解の助けになる。

橋爪大三郎 東京大学助教授

1991-5 3/8



今月の1冊



「何を信じるか」。
この疑問を封じ込める、
現代の免罪符。

陽光院天真寛裕大居士、慈唱院美空日和清大姉、彰武院文鏡公威居士。それぞれ、石原裕次郎、美空ひばり、三島由紀夫氏の戒名だそうである。

故人を偲び、冥福を祈って、戒名をつけていただく。うるわしい習慣かもしれない。しかし、葬式が済んで、「布施料百五十万円、戒名料三百万円也」などと要求されては、たまったものではない。

身近なものはずなのに、よく考えるところの由来も、その実態も、ちっとも明らかでない戒名。それを丁寧に解き明かしてくれる本が現れた。著者の島田裕巳氏は、気鋭の宗教学者。戒名はもともと、日本仏教の秘密について根本から考え直したいという読者に、ぜひお勧めしたい好著だ。

戒名とは、そもそも何なのか？
あえて定義するならば、①俗人である死者に対し、②死後、仏弟子となることの証しに、③僧侶(寺院)が与える特別の名称だ。生前に戒を受け、あわせて戒名も受けるのが本当だという主張があり、それを実行しているグループもある。だが、日本で「戒名」と言えば99%

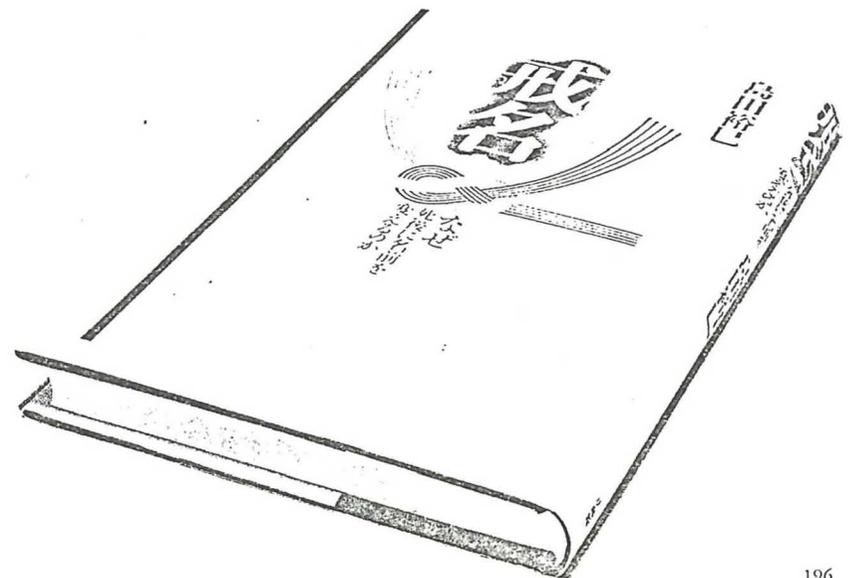
死後戒名のことである。
ところでこのような戒名は、日本にしかないものらしい。インドでは、出家しても俗名のままで、特別の名前をもらうことはなかった。中国の僧侶は、特別の名前(法名)を授かったが、これは戒名と関係ない。まして在家の信者が、死んだら名前をつけるなんていう習慣はない。

これは中国仏教が、葬式に関与しなかったこととも関係しよう。中国では道教が、民衆の間にしっかりと根を下ろし、葬式もとり仕切ってきた。だからそこに仏教が割りこんで、死者に戒名を与える余地などなかった。

日本では、伝統的に死を「穢れ」として忌みきらってきた。そこで、その種の偏見の少ない仏教が、葬送の儀礼をとり行なうようになったものらしい。そして、江戸時代に幕府の政策によって、家単位で代々どこかの寺の檀家になるという、われわれの常識となっている制度の原型が成立した。

明治以後、社会の流動化が進むにつれ、檀家制度は次第に実情に合わなくなってきた。江戸幕府の制度は、人びとが移動し

なせ死後に名前を変えるのか
島田裕巳
法政大学1800円
はしづめだいさぶろう
橋爪大三郎
(東京工業大学助教授・社会学)



と戒名をとっかかりに、その後の納骨、法事……と続く安定した収入のチャンスにしがみつかざるをえなくなっている。

戒名は、寺院経営を成立させるためにある。おまけにそれは、仏教のどんな経典のなかにも、まったく根拠を持たないものなのだ。

戒名と絶縁しない限り、日本仏教に未来はない！
ヨーロッパの近代は、宗教改革によって口火を切った。そしてルターが、まっ先に槍玉にあげたのが、免罪符。「聖書」に何の根拠もない免罪符が、キリスト教の信仰を歪め、墮落させているとローマ教会を攻撃した。これを通過すればこそ、人間は教会の呪縛から解放され、信仰の自由と精神の独立を手にしたのである。

教だろ。江戸時代、布教による新しい信者の獲得も、寺院の外での自由な活動も禁じられ、葬送儀礼に閉じこめられてしまった仏教。そんな情ない状態に安住したまま、今日まで来てしまった。仏教の教理や原則からみて、どんな正当化もできない戒名にとらわれたままであるとするは、もはや仏教の名に値しない。

かじ実際には宗教について何も知らず、自分が何を信じてよいかについて、突っこんだ疑問に直面しないで済ませていけるのは、戒名のせいである。
日本の仏教界は、こうした戒名の問題性にうすうす気づきながら、口をつぐんできた。仏教研究者や宗教学者も、あえてその点を衝かなかつた。戒名の研究を始めてみて、先行の研究がまったく存在しないことに驚いた、と著者は言う。誰も口にしてこないタブー。著者の指摘するように、戒名は、フーコーのいう「権力」でもあるわけだ。

現実問題として、戒名をなくせと言っても急になくなるものではない。むしろ向きの姿勢では何も解決しない。人間が死んだらどういふ儀式を行なうのが正しいのか。これを正面からつきつめることで、仏教の新しい教義や組織も見えてこよう。本書をきっかけに、この次は仏教界の内部から、戒名を厳しく問い直す声が上がることが期待したい。

1991-5 4/8



ヘルシーな一日は、
あたたかな朝食から。

北南の心 朝食の心

何かと忙しい朝。でも、一日の活力源となる朝食はしっかりとって元気にスタートさせたいですね。
ワシントンホテルの朝食は、真心こめておつくりする「おふくろの味」。和食、洋食、おかゆと3タイプの味わいて、おもてなししております。

厚さ1mmの貯金箱
全国のワシントンホテルでご利用いただけるワシントンカード
入会金1,000円(税別)
会員の方の20%OFF!!

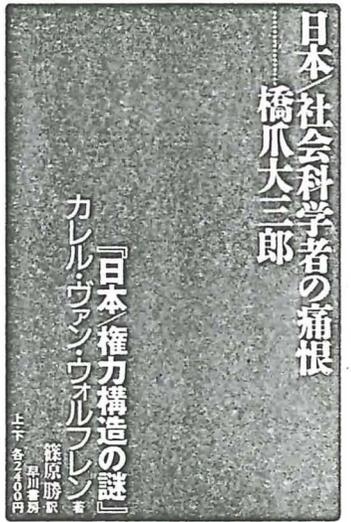
- 全国各地の味覚を遠く離れたあの方へ
ワシントンホテル配給の「ワシントン宅配便」は、全国各地のワシントンホテル支配人が、その土地の特産品、旬の食材、季節の味覚を厳選し、お届けします。お申し込み・お問い合わせは
直営飲食店が深夜までおもてなし
WASHINGTON HOTELS
札幌第1 千葉 姫路
札幌第2 秋葉原 岡山
藤田観光旭川 新宿本館 福山
八戸 新宿新館 鳥取
秋田 横浜 松江
北上 伊勢佐木町 高松
仙台第1 長野 高知
仙台第2 富山 徳島
山形 高岡 小倉
天童 金沢 長崎
鶴岡 静岡北 大分
福島 名古屋第1 宮崎
郡山 名古屋第2 鹿児島
会津若松 名古屋金山 鹿儿島
新潟 岐阜第2 沖縄
宇都宮 新大阪 佐渡リゾート
高崎 神戸
- 92年OPEN予定/福井・燕三条・都城
●ご予約は
東京 ☎(03)3434-5211 名古屋 ☎(052)961-3421
大阪 ☎(06)263-4151 福岡 ☎(092)523-5230
藤田観光ホテル

第1巻第5号 (通巻5号)

「よむ」1991年8月号 pp.22-24 岩波書店

システム
多くの要素が、秩序だった全体をなしていること。系や体系ともい
う。コンピュータができて、システムの動きをシミュレーションで
調べられるようになった。社会をシステムと捉える社会システム論
については、たとえば高田俊「自己組織性」(創文社)を参照。

これほど本格的な日本
論は、めったにないだろ
う。日本という、外部か
らは想像を絶する社会の
謎を、解明せずにおかないという執
念が、周到な筆致のすみずみにみな
ぎっている。
日本はシステムへの支配する国で
ある——要約すれば、それが本書の
主張だ。



日本社会学者の痛恨
橋爪大三郎
『日本権力構造の謎』
カレル・ヴァン・ウォルフレン
藤原勝家
上下各2400円



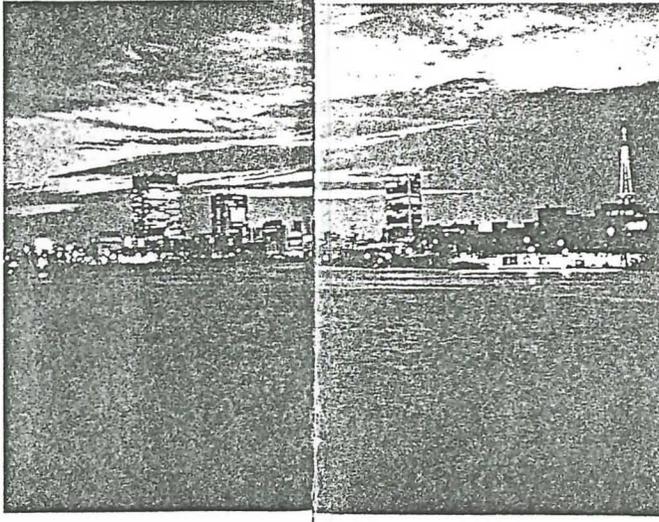
ここで(システム)とは、いわゆる西欧的な主権国家と似ても似
つかないもの。自分の都合で勝手に動きまわる権力のさまざまな
構成要素(高級官僚や自民党の派閥や財界や、農協や警察やマス
コミや暴力団や……)の、人脈や金脈で複雑に絡まりあった全体
のことなのだ。ただしシステムには、意思決定の頂点(責任主
体)が欠けている。そのため自身をコントロールできない。
ここからさまざまな問題が生じてくる。

日本の戦後民主主義は、見かけ上、憲法をいだけ法の支配に
服している。いちおうは成熟した市民社会であるかのような印象
を与えてきた。しかし、その内実はまだたく違ったものだ。法に
よって互いを律する人びとを、市民という。だが、日本社会のい
たるところにはシステムへの不定形な権力が作用して、それ
が人びとの行動を左右してしまう。

システムは政治的責任感の発達した、自立した市民の存在
を許し得ない)のである(下二
八四頁)。

本書は日本社会の権力構造
を、極めて正確にえぐりだ
す。

これは、すばらしい業績で
ある。そして私には、二重の
意味で衝撃だった。ひとつは、
自分の生きる社会がこれほど
にも、世界的な規準に照らし
て常軌を逸した社会であると



ある。この章は、戦前の経済
統制を主導した、主に内務省
の官僚たちが、どのようにし
て戦後のシステムを牛耳る
に至ったかを、実名のレヴェ
ルで克明に追尾している。経
済統制に辣腕をふるった革新
官僚、思想統制に従事した警
察(特高)官僚の多くが、戦後
に生き延びて、今日のシステム
の基礎をつくった。財閥を解体
した占領軍は、彼らに経済統制
の機会を提供し、意図せずして
システムへの形成に手を貸すこ
とになってしまった。
では、我々は、システムへの呪
縛を脱出できるのだろうか?
(システム)とは、日本人の行
動パターンの集積である。それ
は、権力の産物であり、(究極
的には)政治的関係によって決
められる(下三二七頁)。だから、
原理的には、システムは変わ
りうる、と著者も認める。けれ
ども、現実問題として、それ
はむずかしい。もともとあり
そうなのは、(西側世界、こと
にアメリカと、なんらかの暫
定的妥協を図り、システム)が
なんとかお茶を濁しながら生
きている。

日本 あいまいな公私の境界、
自家製「反対勢力」、
農村の集票マシン、
あらゆる組合を食う組合、
マスコミ合唱団の大斉唱、
交際好きな建設業者、吐け(自白せよ)!!
メディアがスポンサーする現実、
「うすれゆく統制力」という神話、
権力の否定……、
小見出しから、
あなたの属するシステムを
検索してください。

【日本権力構造の謎の目次より】
1章=「ジャパン・プロブレム」/2章=とらえど
ころのない国家/3章=抱き込みの包囲網/4章=
(システム)に仕える人びと/5章=アドミニス
トラター/6章=従順な中産階級/7章=国民の監
視者/8章=法を支配下におく/9章=リアリ
ティの管理/10章=文化にかこつけた権力/11章=宗
教としての(システム)/12章=支配する権利/13
章=儀式とおどし/14章=支配力強化の一世紀/
15章=不死鳥の国/16章=世界にあって世界に
属さず

私たちがめらめらなく全共闘を支持
したのも、①社共や戦後知識人に
は問題解決の能力がない、②東大
を解体すべきである、という彼ら
の主張を、直観的に正しいと思っ
たからである。この二点が正しか
ったことは、最近ますます明らか
になっている。ウォルフレンの処
方箋も、似たようなものである。
(理想的には、どうすればよいの

戦前戦中の統制経済
満州事変後、政党政治を排除して軍部とのつながりを強
化した「新官界」のあとを継ぎ、2・26事件以降登場した
「革新官僚」たちは、国家総動員法を頂点とし、重要産業
統制、食糧管理、電力管理によって国民生活全般を中央
の統制下においた。

河合出版

フランシス・キング作品集

日本の雨傘

池田雅之監修
横島昇 訳

英国の代表的作家で元国際ペンクラブ会長
による日本を舞台にした珠玉の短編小説の
ほか、ラフカディオ・ハーンを論じた評論
やエッセイなどを収録 ●定価三〇〇〇円

北京放送 365日

天竺門事件
なぞ激動の
中国を報じ
た日本人
記者の記録
●(八)月録

北京放送
365日
巻一 一冊

月刊 7月未刊

近刊

歩く速度の学問

山本啓十現代文化研究会編
毅然と学問に取り組み、資本の速度に
遅れるなと慎重かつ暴力に宣言する
「新学問のすすめ」 ●(一)月録一七〇〇円

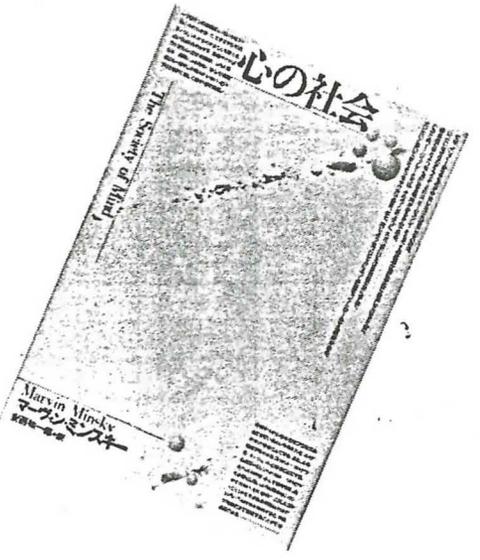
国境を越える教育の旅(後)
鎌田 慧・牧野 剛共編
東欧諸国の政治変革過程で、若者たちの
意識変化や教育現場の変容を、異色コン
ピュが直撃レポート ●(一)月録一四〇〇円

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-1-6
☎03-3354-1481 (定価は税込)

翻訳の世界 二月号

発行——ハベル・プレス(Haber Press) ハベル

一九九一年二月一日発行(毎月一日発行)第十六巻(通巻一七八巻)



だろ？ 手始めに東大を廃校にする必要がある。……(下三二七頁)

だから本書は、ほんとうは日本人によって書かれたのが、いちばんよかったのである。

著者の描き出すヘシテムのあり方は、戦後すぐに「超国家主義の論理と心理」を著し、戦争指導の「無責任体制」を分析した丸山真男が明らかにしたのと、そんなに違わない。けれども丸山はその後ヘシテムがますます強力となって、戦後日本社会の隅々までを蔽いつくすようになるとは考えなかった。それらしい気配にも、目をつぶった。だから日本の学者は、戦後社会がヘシテムに支配されているというテーゼを、本気で実証しようとは誰も思わなかった。

本書を論駁しようとしても、それは無理だろう。まず、本書の議論には、きちんとしたデータの裏付けがある。しかも、その仮説——ヘシテムが日本を支配している——は、きわめて妥当なものだ。論理的にも一貫していて、日本社会の診断学として、まことに的をえている。現在、14カ国で翻訳が進められているそうだが、本書が、現代の日本を知るために、まず最初に読むべき定番の一冊となっていくことは疑いない。

では、本書を受けて、我々は何に手をつけなければならないのか？ 本書は、診断学であっても、日本改造計画ではない。日本をこれからのような社会に作りかえていくかは、日本人である我々の選択にかかっている。本書で著者がわずかに示唆している改造

ボーリマー・ダイジェスト	90.10月号	矢口進也
関西新聞	90.10.12	署名なし
朝日新聞	90.10.21	石川真直
読売新聞	90.10.29	署名なし
週刊プレイボーイ	90.10.30	署名なし
聖教新聞	90.10.31	(双)
沖崎タイムス	90.11.11	島袋哲
琉球新報	90.11.11	林清見
赤旗	90.11.12	江藤俊介
毎日新聞	90.11.12	署名なし
朝日ジャーナル	90.11.16	吉見俊哉
SAPIO	90.11.22	佐田勝
週刊朝日	90.11.23	三浦雅士
週刊東洋経済	90.11.24	河合秀和
中央公論	90.12月号	米本昌平
WILL	90.12月号	金子郁容
月刊プレイボーイ	90.12月号	署名なし
サンデー毎日	90.12.2	関塚野
読売新聞(90年私の一冊)	90.12.24	佐々木毅
東京新聞(対談「出版この1年」)	90.12.30	紀田順一郎、中島誠
ビジネス インテリジェンス	91.1月号	井家上隆幸
法政大学大原社会問題研究所雑誌	91.1月号	五十嵐仁
経済界	91.1月号	松原隆一郎
週刊東洋経済	91.1.25	サイデンステッカー
エコノミスト	91.1.8	内橋克人
文化評論	91.3月号	平野謙一郎
読売新聞(乱読精説)	91.4.1	正村公宏
朝日ジャーナル(ブックガイド'91)	91.4.25(増)	橋爪大三郎
朝日ジャーナル(ボックス'91)	91.4.26	吉見俊哉
ブックマン	30号	増本近夫

の道筋(東大廃校、弁護士の大量養成、最高裁事務総局の改組、教育改革、……)は、あまりに大きすぎて、プランの体裁をなしていない。著者や米国政府がもうちよつとまともな改造プランを作ってしまう前に(作るに決まっている)、急いで我々なりの具体的なプランを考える必要がある。

本書の分析が正しければ、日本と国際社会との衝突は不可避である。(日本のヘシテムと、それ以外の国際的自由貿易体系とは相容れない)下三二五頁。なぜなら現在のヘシテムは、とどまることを知らない経済成長とシェアの拡大至上命令としていて、それを誰もコントロールできないからである。だからヘシテムは「外圧を利用して、軌道の微修正をはかっているのだが、そろそろそれではどうしようもない段階にさしかかってきた。ウォルフレンも指摘しているが、ヘシテムの本質は、権力なのである。だからやはり、急所は政治改革にある。社会党対民党という、選択とは程遠い選択の構図を突き崩して、日本の市民が、自分たちの選択性を積極的に表明できる制度的な回路を切り開くこと。ここが急所だ、と私は睨んでいる。我々がどれだけ、ヘシテムの呪縛から解放されるかに、世界史の今後も左右されえするのだ。」

野家啓一(哲学)

①啓蒙の弁証法②真理論③心の社会④時間と物語⑤行為と出来事⑥ハイデガーとナチズム⑦精神について⑧エイズとその隠微⑨ワイトゲンシュタインと同性愛⑩意識論から言語論へ★薔薇の名前(上・下)★愛の新世界(抄・滋澤龍彦文学館4所収)★私の紅衛兵時代

大澤真幸(社会学)

①視覚新論②心の社会③行為と出来事④ジャン・ジャック・ルソー⑤目的概念と合理性⑥他者のユミニスム⑦ハイデガーとナチズム⑧自由の正当性⑨ワイトゲンシュタインの言語論⑩入門・レギュラシオン★浴室★エイズとその隠微★ある子殺しの女の記録

橋爪大三郎(社会学)

①やまもち焼きの土器つくりのメタマジック・ゲーム②柔らかな機械③哲学の小さな学校④法学・哲学論集⑤啓蒙の弁証法⑥近代の哲学的デイスクリー・II★ソドムの百二十日

久間十義(小説)

●啓蒙の弁証法●小説の精神●印象派の人びと●フリッツ・ベア短編集●私が愛したグリーンゴ●ラスト・テストメント●タイタンのゲーム●ブレイヤー●ジョーンズの世界●黒い時計の旅●侍女の物語

